

浜松城跡 43次調査の概要

2022年3月

浜松市教育委員会



1. 浜松城跡の概要

浜松城の歴史 戦国時代の城郭が数多く分布する遠江は、今川氏、徳川氏、武田氏が争った地域であり、浜松城はその舞台のひとつです。引間城の時期を含む浜松城およびその周辺の動向は、時代や城主の変化などをもとに1〜6段階に分けて整理できます。また、城郭として使用される前には古墳の造営などが行われており、この時期を0段階として計7つの段階に分けて土地利用の履歴を捉えることができます。

第0段階は、引間城の時期を含む浜松城が築城されるよりも前の古墳時代や古代・中世前半を中心とした時期です。古墳時代には作左山横穴をはじめとした古墳の造営が行われました。また浜松城跡や浜松城下町遺跡からは、須恵器や土師器が一定量出土し、古代に集落が造営されたことが明らかです。

第1段階は、引間城を地域拠点とし、今川氏等が領有した段階です。浜松城の前身城郭である引間城の築城時期は明確ではないものの、16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が3代にわたり城主を務めました。引間城は江戸時代の絵図において、土塁と堀に囲まれた4つの正方形の曲輪が表現され「古城」と記載された地区にあたります。現在、元城町東照宮が所在する北西の曲輪では、16世紀代の遺構や大量のかわかけが出土しており、今川氏領有期や徳川氏領有期に城郭の一部として機能していたことが明らかです。

第2段階は、戦国時代後半（徳川氏領有期：1570～1590）です。徳川家康は元亀元年（1570）、岡崎城から引間城へと拠点を移し、西側の丘陵へと城郭を拡張し、浜松城と改称しました。武田勢力との軍事衝突に備え、徳川家康が浜松城をたびたび改築した記録が残されています。徳川家康在城期における浜松城は、江戸時代の天守曲輪・本丸・二の丸・古城・西端曲輪・出丸・作左曲輪・三の丸の一部を中心とした範囲と考えられます。

第3段階は、安土桃山時代（堀尾氏領有期：1590～1600）です。徳川家康の関東移封に伴い、浜松城に豊臣系大名である堀尾吉晴が入り出雲に移封されるまでの10年間です。堀尾吉晴は、高石垣の構築や瓦葺き建物の



浜松城跡の位置と周辺の城跡

建築を行い、浜松城を織豊系城郭へ改築しました。発掘調査の成果から堀尾氏が城期の浜松城には天守や南東隅に櫓が存在した可能性が高く、天守曲輪を中心に江戸時代の絵図に描かれた様子とは異なる城郭景観が広がっていたことが明らかになりました。

第4段階は、江戸時代（譜代大名領有期：1603～1868）です。江戸時代の浜松城主は譜代大名の十家二十二代を数えます。歴代の城主により城域の拡大や改修が行われたことが文献史料や発掘調査成果から明らかです。二の丸御殿の建設、三の丸の拡張などは、江戸時代の早い段階で行われたとみられます。江戸時代には、城郭の役割は軍事拠点から政務空間へと変化しました。軍事的な機能を持つ天守曲輪などの中枢部は象徴的な空間へと変換し、二の丸が中枢を担いました。

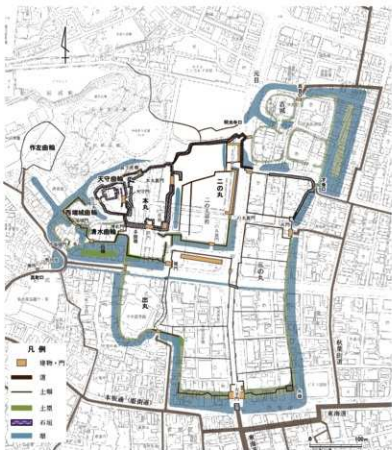
第5段階は、明治時代から太平洋戦争終戦までの期間です。浜松城の建物や土地は、「廃城令」に先立ち、明治5年（1871）から払い下げが進められ、城郭に関わる建造物はすべて失われました。二の丸や三の丸は民有地化に伴い、大規模な開発が行われ市街地となりました。天守曲輪は展望台に茶店が付属する遊興施設、本丸は寺や学校用地として使用されました。

アジア太平洋戦争時は市街地も空襲の標的となり、昭和20年（1945）6月の浜松大空襲によって、市街地の木造建築のほとんどが焼失し、近世城下町からつづく景観が失われました。

第6段階は、アジア太平洋戦争の終戦から現在までです。「浜松こども博覧会」を契機に浜松城周辺は公有地化が進められ、浜松城公園が開設されました。昭和33年（1958）に復興天守閣が建設され、その翌年、昭和34年（1959）には浜松市指定文化財の第1号として浜松城跡が指定されました。

戦後復興期を中心に、浜松城跡には公共施設が集中しましたが、体育館や小学校などの施設移転を契機として、浜松城がもつ歴史情報を活かした整備が進められています。

絵図に描かれた浜松城 江戸時代に浜松城を描いた絵図が残されており、城郭の構造など検討する上で必要な情報が記録されています。「青山家御家中配列図」は、17世紀後葉に浜松城主を務めた青山氏により作成されました。浜松城の曲輪配置や番所、寺社、町屋が描かれています。「安政元年浜松城絵図」には、浜松城の構造とともに嘉永7（安政元）年（1854）年11月4日に発生した安政東海地震の被害状況が記されています。このほか「浜松城二の丸絵図」（8頁左下）は、17世紀後葉の二の丸御殿の詳細を描いた絵図です。政務を執行する政治空間「表御殿」を青色、城主の居住空間「奥御殿」を赤色で描き、部屋割りなどの詳細がわかります。



浜松城跡復元図



浜松市博物館蔵「青山家御家中配列図」（17世紀後葉・調査区周辺拡大）

段階	上級城主等	城主等	西階	和階	浜松城出土瓦	浜松城の築城等	おもなできごと	
第0段階						石垣城の築城か	6・7世紀：横穴墓・古墳造営	
第1段階	引揚城	尾張國津島郡引揚	1023	元龜				
		尾張國津島郡引揚	1545	永祿				
第2段階	第3段階	今川	1549	1570	1573	徳川	徳川家康	1560年：桶狭間の戦い 1565年：今川氏真、飯尾虎重を殺害 1568年：徳川家康、遠江に侵攻 1570年：家康、浜松城築城開始 1572年：三方ヶ原の戦い
		徳川	1560	1580	1583	徳川	徳川家康	深まる浜松城の改築 (1578～1581)
		徳川	1590	1594	1598	徳川	徳川家康	織豊系城郭浜松城への改築
		徳川	1600	1601	1601	徳川	徳川家康	1579年：堀山殿と信康を殺害・秀忠誕生 1582年：天正壬午の乱（戦国大名武田家滅亡） 1586年：家康、秀吉の臣下となる 1590年：家康、関東移封 1591～1598年：文禄・慶長の役 1600年：関ヶ原の戦い 1601年：家康、東海道に伝馬所を制定
		徳川	1608	1608	1608	徳川	徳川家康	
		徳川	1619	1619	1619	徳川	徳川家康	近郊城郭浜松城への改築 東海道を基準とした大手門の設置と 三の丸の築造
		徳川	1620	1620	1620	徳川	徳川家康	
		徳川	1644	1644	1644	徳川	徳川家康	
		徳川	1655	1655	1655	徳川	徳川家康	1655年：大風雨により、浜松城内に被害
		徳川	1675	1675	1675	徳川	徳川家康	1675年：小天竜が原助堀により断切り
		徳川	1680	1680	1680	徳川	徳川家康	1680年：大風により、浜松城内に被害
		徳川	1691	1691	1691	徳川	徳川家康	1691年：城内の屋敷で火災
		徳川	1700	1700	1700	徳川	徳川家康	1700年：城内の屋敷で火災
		徳川	1706	1706	1706	徳川	徳川家康	1706年：城内の屋敷で火災
徳川	1707	1707	1707	徳川	徳川家康	1707年：宝永地震		
第4段階	浜松城	徳川	1729	1729	徳川	徳川家康	宝永地震により被害を受ける 天守台付焼・富士見地蔵塔か	
		徳川	1730	1730	徳川	徳川家康		
		徳川	1736	1736	徳川	徳川家康		
		徳川	1738	1738	徳川	徳川家康		
		徳川	1740	1740	徳川	徳川家康		
		徳川	1748	1748	徳川	徳川家康		
		徳川	1750	1750	徳川	徳川家康		
		徳川	1760	1760	徳川	徳川家康		
		徳川	1768	1768	徳川	徳川家康		
		徳川	1780	1780	徳川	徳川家康		
第5段階	徳川	徳川	1800	1800	徳川	徳川家康		
		徳川	1817	1817	徳川	徳川家康		
		徳川	1820	1820	徳川	徳川家康		
		徳川	1844	1844	徳川	徳川家康		
		徳川	1854	1854	徳川	徳川家康		
		徳川	1860	1860	徳川	徳川家康		
		徳川	1868	1868	徳川	徳川家康		
		徳川	1873	1873	徳川	徳川家康		
		徳川	1948	1948	徳川	徳川家康		
		徳川	1950	1950	徳川	徳川家康		
第6段階	徳川	徳川	1958	1958	徳川	徳川家康		
		徳川	1959	1959	徳川	徳川家康		
		徳川	2014	2014	徳川	徳川家康		
		徳川	2017	2017	徳川	徳川家康		
		徳川	2021	2021	徳川	徳川家康		
		徳川	2021	2021	徳川	徳川家康		

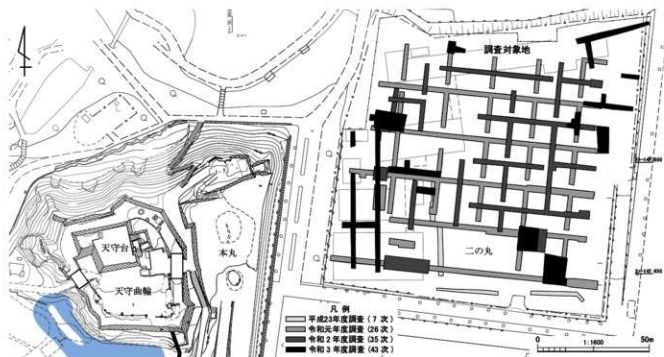


2. 調査の成果

調査地の概要 今回の調査対象地は、浜松城のうち、本丸・御誕生場（2代将軍徳川秀忠誕生伝承地）・二の丸にあたります。浜松城の廃城後は、住宅地や工場用地等に利用されました。昭和23年（1948）には、浜松市立元城小学校がこの地に移転開設され、平成29年（2017）まで所在していました。

調査の方法と経緯 元城小学校跡地を対象とした発掘調査は、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受け、令和元年（2019）から継続して浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施しています。令和3年度の発掘調査は、令和3年（2021）6月から実施しました。

令和元・2年度調査では、対象地の広範囲において浜松城にかかわる歴史情報が良好な状態で埋没していることが明らかになりました。なかでも、本丸北東隅石垣と本丸東堀を確認し本丸の規模や構造が判明したことや、二の丸御殿の建物基礎とみられる遺構を確認したことが特記できます。それらの成果を踏まえ令和3年度の調査は、本丸石垣や二の丸御殿の構造をより明らかにすることを目的として、令和2年度の調査区を拡張し補足調査を行いました。また、二の丸外辺部の遺跡の残存状況や内容を明らかにするため、調査対象地の北東部を中心に幅2m程度の調査区を設け調査を行いました。検出遺構は原則として平面検出に留めましたが、一部の瓦集積や溝状遺構などについては、規模や時期を確認するため、部分的に掘削を伴う調査を実施しました。



調査区配置図



令和元年度調査（26次）オルソ画像

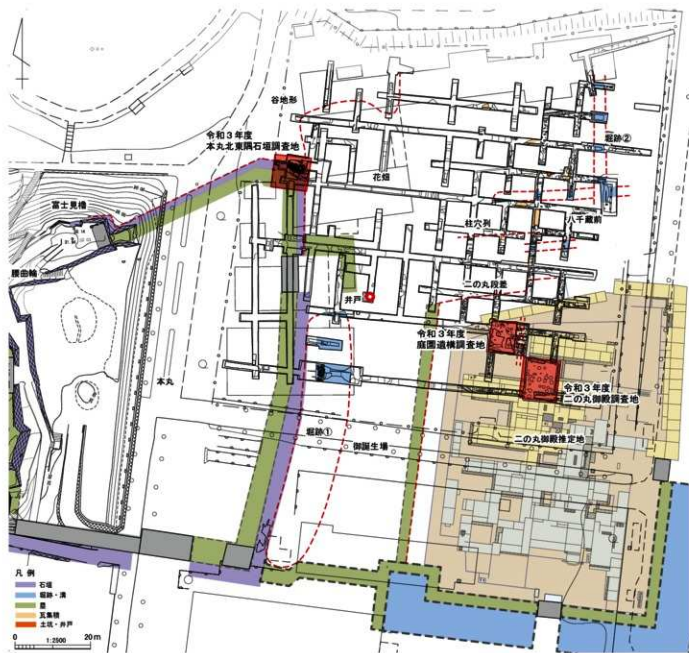


令和2年度調査（35次）オルソ画像



令和3年度調査（43次）オルソ画像

(1) 元城小学校跡地における調査成果



令和元年度～3年度検出遺構

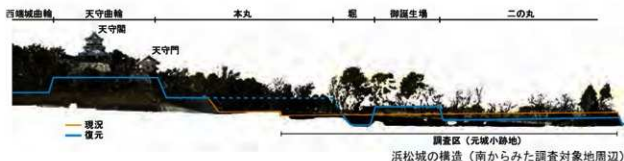
検出遺構の概要 令和3年度の発掘調査により、調査対象地には浜松城の本丸・御誕生場・二の丸の構造に迫る歴史情報が良好な状態で埋設していることが判明しました。また、戦国時代から近代に至る時期の遺構が確認でき、調査対象地をめぐる土地利用の変遷が明らかになりました。

令和3年度の調査では、本丸北東隅石垣の残存状況を把握するとともに、石垣の特徴を明らかにすることができました。

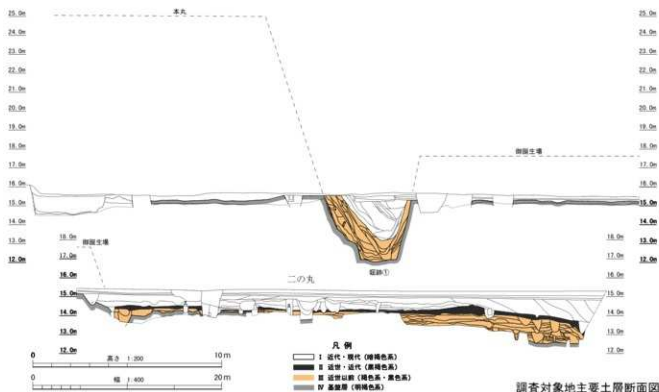
二の丸奥御殿に相当する位置では、礎石や礎石据付穴といった建物基礎の痕跡に加え、雨落ち溝を検出しました。また、二の丸の北西隅では江戸時代の庭園遺構を検出し、二の丸御殿に庭園があったことが明らかになりました。



(2) 浜松城の構造と調査区の土層堆積



これまでの調査により、浜松城の本丸・御誕生場・二の丸の構造が明らかになってきました。東側から西側に向かい、雑壇状に高さを増し天守閣や天守門がある天守曲輪が最も高い位置にあります。御誕生場と二の丸の境界では、1.2 m程度の段差が確認でき、二の丸が一段低い場所にあったことがわかりました。調査対象地では、上段面に本丸が位置し、中段面に御誕生場、下段面に二の丸と続きます。



調査対象地主要土層断面図



◀現代の地表
近代の土層

江戸時代の
地表と堆積土

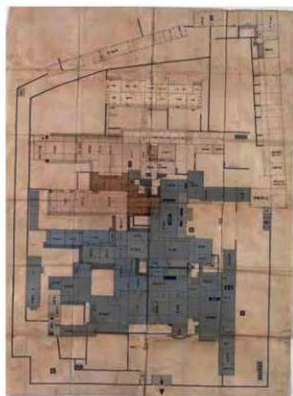
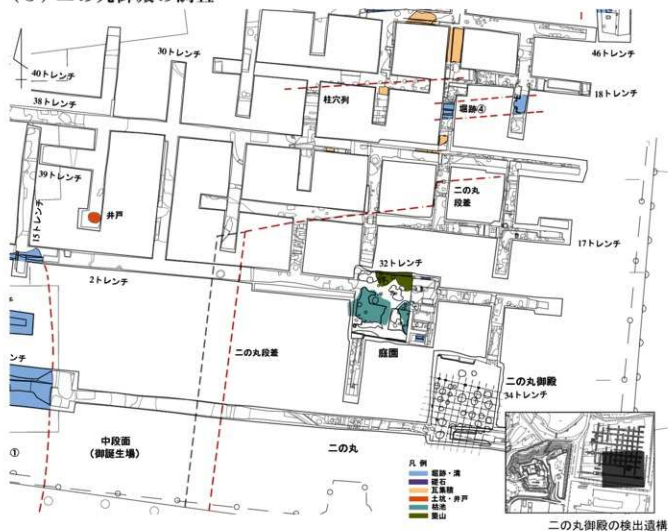
御殿構築にともなう
盛土

◀戦国時代の地表

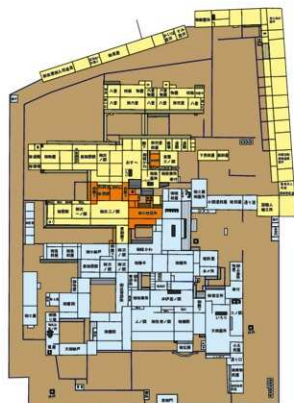
◀基盤層

土層堆積状況 基盤層の検出標高が高い調査対象地西側では、現代の表土・造成土の直下で遺構や基盤層を確認しました。いっぽう、基盤層の検出標高が低い二の丸御殿部分では、下層から基盤層、戦国時代以前の遺構と堆積土（第0～3段階）、江戸時代の盛土と遺構面・堆積土（第4段階）、近代の造成土と煉瓦造り建物の基礎や近代の市街地の痕跡、アジア太平洋戦争による焼土と瓦礫集積層（第5段階）、現代の表土と小学校のグラウンド造成土（第6段階）が確認できました。なお、戦国時代の堆積層と江戸時代の御殿の地表面との間には約1mの盛土層がみられ、二の丸御殿建設にあたり大規模な土木工事が行われたことがうかがえます。

(3) 二の丸御殿の調査



「浜松城二の丸絵図」

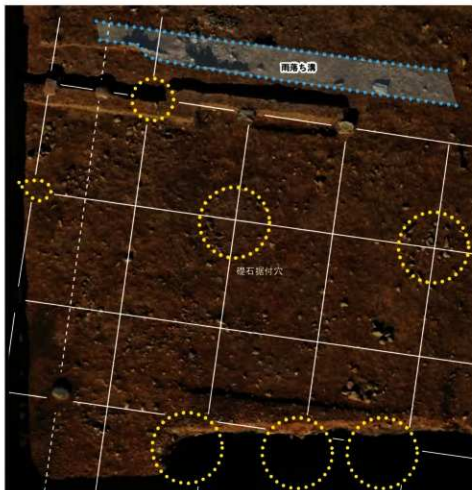


二の丸御殿の構造 (「浜松城二の丸絵図」をトレース)

二の丸御殿の建物遺構

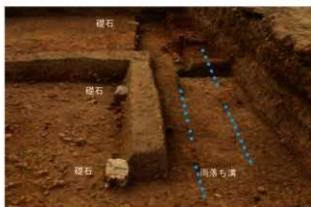
令和3年の調査で二の丸御殿の建物基礎を発見しました。確認した遺構は、柱を支える礎石や礎石の据え付け穴、軒先の雨水を受ける雨落ち溝などです。礎石と礎石の中心間の距離は約2mであることから、建物は6尺5寸(1.97m)を基準とした京間を用いた建物といえます。出土遺物や土層堆積状況から、江戸時代の二の丸御殿の基礎と考えられます。

また、東西に並ぶ礎石の北側には、瓦で側面を囲った「雨落ち溝」を検出しました。雨落ち溝が設けられていることから北側に開けた部分であることが判明しました。瓦の出土量が少ないことから、屋根の大部分は柿葺きであったとみられます。



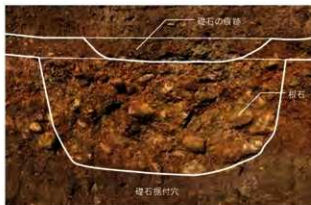
検出した二の丸御殿の基礎配置と雨落ち溝

礎石と雨落ち溝 建物基礎(礎石)6石と礎石を設置するために掘られた穴(礎石据付穴)や礎石の痕跡を6箇所以上確認しました。また、礎石列の北側には雨落ち溝が敷設されていることも明らかになりました。列をなした礎石と雨落ち溝を確認できたことは、発掘調査成果と二の丸御殿を描いた絵図を照合する有力な手がかりとなります。



礎石と雨落ち溝

礎石据付穴 整地した地盤に、直径0.6～0.8m、深さ0.6m程の穴を掘り、根石と呼ばれる礎を敷き詰め、その上に礎石が据え置かれていました。礎石が取り外されたものでも、礎石据付穴や礎石が抜き取られた痕跡から礎石の配置を推定することができます。



礎石据付穴

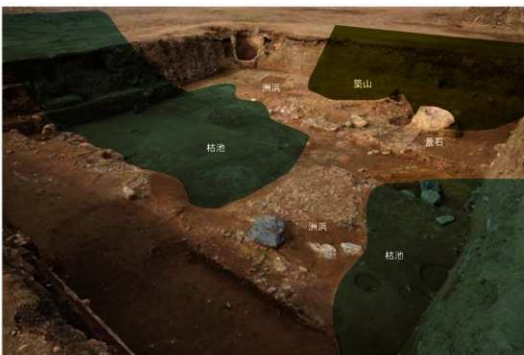
二の丸御殿の庭園遺構

二の丸の北西隅で
洲浜、築山、景石、
枯池により構成される
枯山水庭園を検出
しました。庭園遺構
は、二の丸御殿の生
活空間である「奥御
殿」に付属したもの
と捉えられます。な
お、「浜松城二の丸
絵図」をはじめ、浜
松城を描いた絵図に
は庭園は表現されて
おらず、絵図からは
うかがい知ることが
できない二の丸御殿
の様相が発掘調査に
より明らかになりま
した。



庭園遺構（北東から）

枯山水庭園 二の丸
御殿北西隅で庭園を
検出しました。水を用
いず石や砂利等で山
水風景を表現した庭
園と捉えられます。
円礫を敷き詰めた
岸边空間である洲
浜、大型のチャート
を用いた景石、三
和土を用いた枯池
によって構成されて
います。景石の北側
には、庭園内に築か
れた人工の山である
築山と捉えられる痕
跡も認められます。



庭園遺構（南東から）

庭園遺構は枯池内から出土した瓦の時期から江戸時代のもので捉えられます。

発掘調査により確認した庭園遺構の範囲は東西約9m、南北約10mにおよびます。

庭園は南からの景観を意識して作られています。手前に洲浜と枯池が広がり、景石の背後に築山が控えています。庭園の南側には奥御殿の中でも重要な空間があったと推定できます。



庭園遺構の詳細（南東から）

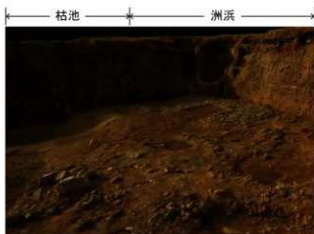
洲浜・築山と景石 小型の円礫が敷きならされた部分は、洲浜と呼ばれます。洲浜には高低差があり、円礫が見られない北側部分には築山があったとみられます。

景石には、長辺0.8m、短辺0.6m、高さ0.5mほどあるチャートが用いられています。

枯池と洲浜 枯池は三和土を用いてつくられています。枯池底部の三和土は西側中央部が最も低くなっています。洲浜と枯池の境界部分では、洲浜の末端を覆うように三和土が施されています。枯池の平面形は不整形で、南北約5m、東西は調査区外に続くため10m以上の規模と捉えられます。



洲浜・築山と景石



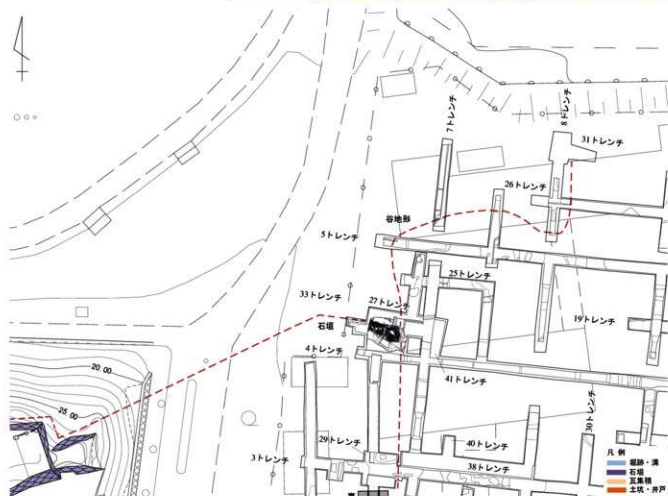
枯池と洲浜

(4) 本丸北東隅石垣

本丸北東隅石垣は、調査対象地北西部で検出しました。地中に埋もれていたため、令和2年度の調査で発見されるまでの間、絵図から存在をうかがい知ることができた程度でした。

発掘調査により隅角部が検出でき、本丸の規模が明らかになりました。石垣は野面積み技法が用いられ間詰石には円礫が多用されています。天守曲輪の石垣との共通性から、1590年から1600年の間に浜松城主を務めた堀尾氏が築いた石垣と想定できます。

北面の石垣は調査対象地から西側の富士見櫓へと続く部分についても残存している可能性が高まりました。



本丸北東部の検出遺構



本丸北東隅石垣検出状況

石垣の詳細

東西に伸びる石垣北面において、根石の下及び前方に幅20cm程度、深さ幅30cm以上の規模で、栗石が敷き詰められている様子を確認しました。根石（石垣の最も下にある石）を固定するための地業の痕跡とみられます。南面の石垣では石垣前面の栗石層がみられないことから、地形や地質に合わせて工法が選択されたとみられます。

北面や東面の上部は、石垣の表面が平滑に仕上げられています。東面の隅角付近では、根石から上へ3石までの範囲において、石垣面に凹凸がみられます（写真中黄色の点線より下の範囲）。凸凹がみられる下3石は人為的に埋められており、石垣構築時から埋めることを前提にしていたと考えられます。

崩落した築石とかかわりけ

本丸北東隅石垣の北側では、石材が集中して出土しました。地震等によって石垣が崩落した痕跡と想定できます。さらに、崩落した石垣の上から完形のかかわりけが出土しました。かかわりけは19世紀頃のものと思われ、石垣の崩落は19世紀のことと捉えられます。



北面石垣前面の栗石



石垣表面の違い



崩落した築石とかかわりけ

(5) 主な出土遺物と出土状況

瓦を集めて廃棄したとみられる瓦集積や堀の埋土を中心に戦国時代から江戸時代の浜松城に関わる遺物が多数出土しました。瓦集積は二の丸の外周部を中心に分布がみられます。出土した瓦は江戸時代のもが主体です。二の丸の建物に瓦が多く用いられたのは、江戸時代以降であったことがうかがわれます。



瓦集積



鬼瓦出土状況



内耳鍋

底部に一部欠損があるものの、ほぼ完形です。16世紀後半～17世紀前半のものと捉えられます。胴部上半内側に二つの把手を有しており、把手の付された位置から緩やかに外反しています。屈曲部以下の胴部外面には、ほぼ全面に炭化物が付着しています。

家紋瓦

複数の家紋瓦が出土しました。18世紀に城主を務めた本庄（松平）氏の家紋「繫九目結紋」をあしらった軒丸瓦が2点、鬼瓦が2点出土しました。

対象地における発掘調査では、「繫九目結紋」をあしらった瓦が他の家紋瓦に比べて多く出土しています。本庄（松平）氏が城主を務めた時期に瓦葺き建物の建築や修理が行われたことを示していると捉えられます。

「繫九目結紋」を有した鬼瓦は、比較的遺存状態はよく、最大幅約50cm、高さ約20cmの大きさです。頭には繫九目結紋があしらわれ、家紋の周囲には竹管文が充填されています。鬼瓦の左右には雲が付き、下端はほぼ水平に造られています。



鬼瓦



軒丸瓦

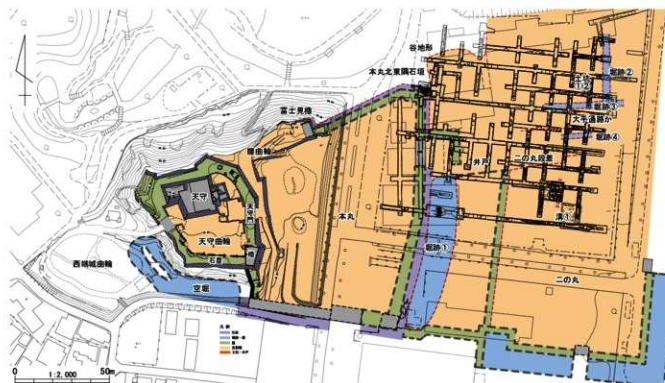


軒丸瓦

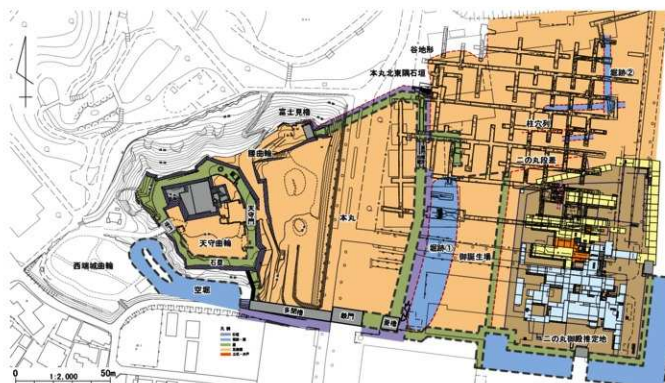
3. 課題と展望

令和3年の調査の大きな成果として次の3点があげられます。①本丸北東隅石垣が調査対象地を越え本丸方向（西側）へ向かって遺存している可能性が高いことが判明しました。②二の丸御殿の礎石配列の一端が明らかとなりました。③二の丸において絵図に描かれていない庭園遺構を確認しました。

二の丸御殿は、礎石配列等から絵図と比較検討し遺構の位置付けが可能です。西側へ広がる庭園遺構は全体像の把握が求められます。絵図と発掘調査の成果を総合的に検討し、浜松城の実態に迫っていきます。なお、3年間の調査成果をまとめた発掘調査報告書を令和4年度に刊行します。



安土桃山時代（堀尾氏が在城期）を中心とした時代の遺構（一部、戦国時代を含む）



江戸時代の遺構 ※御殿などの建物の位置は推定

報告書抄録

書名(ふりがな)	浜松城跡43次調査の概要 (はまつじょうあと43じちょうさのがいよう)							
編著者名	和田達也・長谷川敦章(編)							
編集機関	浜松市市民部文化財課(浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL.(053)457-2466							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2022年3月18日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
浜松城跡	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 45秒	137度 43分 30秒	2021年6月1日 ～ 2022年3月18日	1,088㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代		石垣 堀跡 瓦集積 礎石 庭園		瓦 陶磁器 土師質土器		本丸北東部隅の石垣の規模と構造を確認。二の丸御殿推定地において御殿建物の基礎および庭園を確認。
要約	<p>浜松城公園長期整備構想に関わり、令和元(2019)年から旧元城小学校跡地を対象として、浜松城跡の本丸、御誕生場、二の丸部分にあたる当該地の確認調査を実施し、令和3年度が3年目である。本丸北東隅石垣は安土桃山時代に構築された石垣の特徴を良好な状態で残していることが明らかになった。また、北面の石垣が調査対象地の西端まで良好な状態で残っており、公園内でも残存している可能性が高いことが明らかになった。二の丸御殿では、御殿の建物基礎である礎石や礎石据付穴の平面プランを確認し、近世浜松城の中核部の建物に関する重要な歴史情報を得た。また、御殿に付随する庭園を検出した。絵図には描かれていない二の丸御殿の実態に迫る貴重な情報を得た。</p>							

浜松城跡 43 次調査の概要

2022年3月18日

発行 浜松市教育委員会

編集 浜松市市民部文化財課
(教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

印刷 中部印刷株式会社